

## 巻頭言

# 学会誌の役割

慶應義塾大学医学部医療政策・管理学教室教授  
池上 直己

本号より医療経済研究機構の機関誌「医療経済研究」が、医療経済学会の「医療経済学会雑誌」を兼ねることになった。そこで、学会誌の役割について検討してみたい。学会は、真理の追究について、パラダイムと方法論をある程度共有した者同士が設立・運営し、学会誌は学術総会とともに、これらの者が新しい学術成果を発表し、相互に評価する場である。そして若手研究者にとっては、学会誌への掲載は研究者としての登竜門にもなる。

方法論はパラダイムから導き出され、時には新しい方法論を用いた研究成果によってパラダイムが変容することもある。しかしながら、学会誌に掲載されるためには、会員の査読による編集委員の審査があり、その際の基準はパラダイムとの適合性、データベースと方法論の適切性、結果の解釈の妥当性などが評価される。したがって、掲載された論文によってパラダイムが変化することよりも、補強される可能性が高く、研究分野として確立されればこの傾向がいつそう強まる。かくして学会誌は現実の世界から遊離した患者の楽園となる危険性を常にはらんでいる。

さて、当雑誌はどうであろうか。「医療経済学」については、パラダイムも方法論も共有されていると言い難い。筆者の見解に対して、「医療経済学」を、経済学的手法を医療において適用する経済学の一分野として捉える者からは異論が出よう。確かに経済学を主として、医療を従とする分野として捉えるならばそうであるかもしれないが、医療従事者にとっては主客が逆転しており、医療が主で、経済を従とする分野として捉えており、「経済」も一般に費用に関連したデータの収集としてしか認識していない。

前者の立場を貫徹すれば、会員は経済学者にほぼ限られるので価値観は共有され、論文採否の基準についてもコンセンサスが得られやすい。しかし、医療の分野は制度によって大きく規定され、また医師を始め医療従事者の行動を理解するには社会学的な素養も必要であるので、経済学の仮説に従って分析しても現実と遊離してしまう危険性がある。一方、後者の立場は、既存のhealth services research (医療研究)との相違が不明確になり、学会誌としての独自性を確立することが難しくなる危険性がある。

学会誌としての創刊号の巻頭言としては、もっと威勢のいい、バラの色の発展を願う内容としたほうが適切であったかもしれない。しかし、謙虚且つ冷徹に現実を認識することが、いかなる事業においても不可欠であり、学会誌としての刊行の場合も然りである。今後の発展のためには、足して二で割るという官僚的調整ではなく、会員相互の異質性が対話を介してシナジー効果を発揮する体制が必要であり、こうした体制が早急に構築することを期待して稿を終える。